



「型」が身につくカルテの書き方

佐藤 健太 著

B5 頁 140 2015 年

本体 2,800 円＋税

ISBN978-4-260-02106-7 医学書院刊

評者 藤沼 康樹

医療福祉生協連家庭医療学開発センター長/

千葉大大学院看護学研究科附属専門職連携教育研究センター特任講師

これまで寡聞にして、カルテ記載に関してフォーマルな医学教育カリキュラムはあまり目にすることがない。むしろいわゆる POS システムにおける SOAP(主観的情報、客観的情報、評価、診療計画)に分けて記載することはよく普及しているが、その意味はあまり知られていない。

本書の特徴は、医学教育における医師の成長段階としての RIME モデル(Reporter⇒Interpreter⇒Manager⇒Educator)と SOAP(Subjective, Objective, Assessment, Plan)を対応させて、診療記録を教育や診療の質改善と結び付けているところにある。そして、これまでは単に“患者の訴えを書く領域”とされていた SOAP における「S」を「間接的に得られた情報」，“診察や検査結果を記載する領域”とされていた「O」を「直接観察による所見」と明快に定義し直している(これらの情報をどう集めるかは診療の場によって違うことも強調されている)。アセスメントの「A」はしばしば問題リストや異常値の羅列になるが、これを「意見」と定義し、省察のもとに自身の考えを

記載する場としている。このアセスメント「A」に意見を論理的に記載すること自体が、臨床推論能力の訓練そのものになるであろう。それに基づき診療計画「P」を記載するが、ここに含まれる内容として予防や退院調整、介護福祉サービスを重視しているところが、著者の総合診療医らしさを感じる。

著者は、診療所における地域ケアや在宅診療から、大規模総合病院まで非常に幅広い場での診療経験があり、本書における診療の場(病棟、外来、訪問診療、救急、ICU)ごとのカルテ記載の記述は圧巻である。恐らくこれだけのバリエーションのある診療現場における診療情報に関して深い洞察ができる医師はそうそういないし、分担執筆になりがちなこうしたテーマを単著として完成させた著者に敬意を表したい。

今後の日本のヘルスケアシステムの大きな課題が連携であり、カルテがそのためのコミュニケーションの重要な結節点になるであろう。若い研修医だけでなく、自身の診療の質の向上をめざしている全ての臨床医に一読を勧めたいと思う。